

平成 4 年度

**掛川市埋蔵文化財発掘調査年報**

1·9·9·3

**掛川市教育委員会**



## 例　言

1. 本書は、平成4年度に掛川市内で実施した発掘調査の概要を紹介するためにまとめたものである。
2. 報告文は発掘調査担当者が執筆し、編集は戸塚が行った。
3. 本書に掲載した発掘調査の内容は、今後整理調査を進める中で変更する可能性がある。
4. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

## 凡　例

1. 調査地を表す位置図は、2万5千分の1の地形図とそれを掛川市全図にあてはめたものの2つで表している。

# 目 次

## 例言

## 凡例

### 1. 発掘調査の概要

① 山口遺跡	.....	1
② 掛川城	.....	4
③ 掛川城大手門跡	.....	8
④ 堀ノ内古墳群	.....	12
⑤ 原川遺跡	.....	15
⑥ 東原遺跡	.....	18

今ま ぐら い せき  
① 山口遺跡

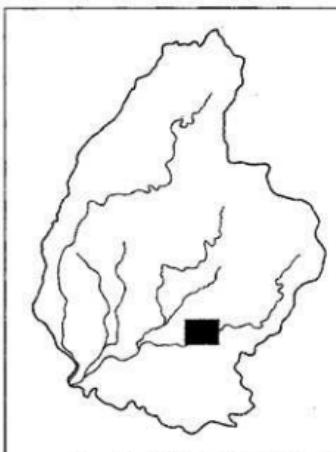
所在地 掛川市成瀬

調査目的 技術棟建築に先立つ発掘調査

調査期間 平成4年4月23日～7月31日

調査面積 1600m<sup>2</sup> (800m<sup>2</sup> × 2面)

調査主体 掛川市教育委員会



#### 調査概要

##### 1. 遺跡の位置・立地

山口遺跡は掛川市中心地から東方、葛川地区から成瀬地区にかけての広範囲にまたがり、逆川により形成された沖積地に立地する。

##### 2. 調査の成果

###### ①第1面

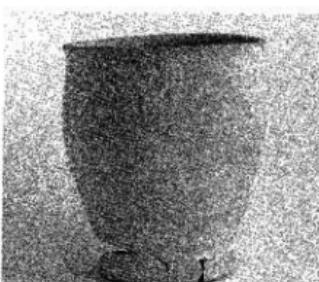
遺構は溝のみで、いずれも水の流れた様子が窺えるので、排水・導水路として使われたか、または区画の溝であったとも考えられるが、調査面積が狭く全容が不明なためはっきりしたことは言えない。時期は古墳時代後期（約1400年前）から平安時代（約1000年前）である。遺物の出土量は絶じて少なく、ほとんどは小さな破片であった。写真図版に掲げたものは、比較的形状がわかるものである。土師器台付壺胴部下半～脚部片は遺構外の出土である。台付壺は煮炊きをするもので、火の回りをよくするために底を高くしている。須恵器陶臼はSD08から出土したもので、今の擂り鉢のように使われたものである。

###### ②第2面

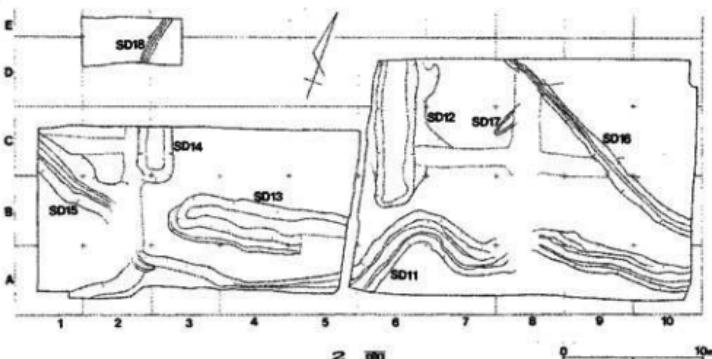
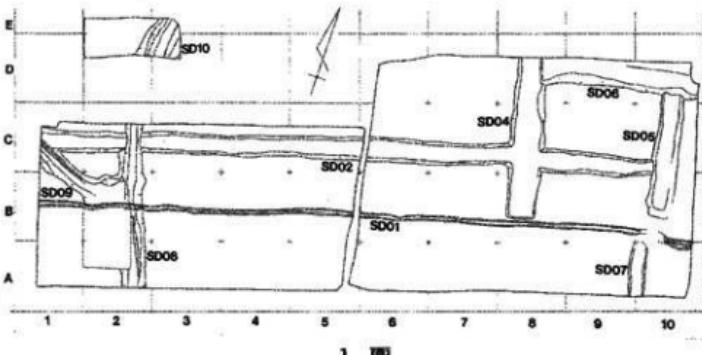
この面も遺構は溝のみである。蛇行するSD11は自然の流路と思われる。SD12・13・14は配置関係に特徴がみられ方形区画をとっており、方形周溝墓になると思われる。出土遺物は土師器の小破片のみであるが、古墳時代前期（約1600年前）の方形周溝墓だと思われる。



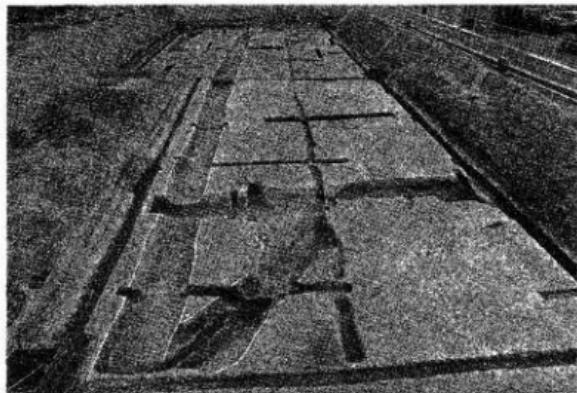
土器器 台付甕



須恵器 陶臼



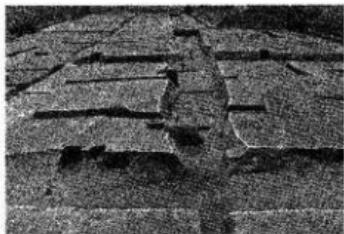
遺構全体図



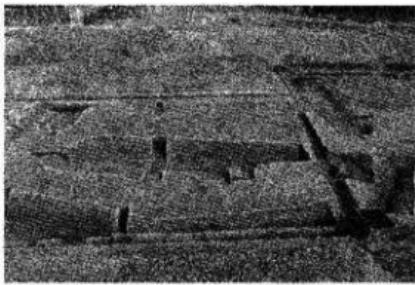
第1面全景  
(西より)



第2面全景  
(東より)



SD 02・04・05



SD 12・13・14 (南より)

## ② 掛川城跡

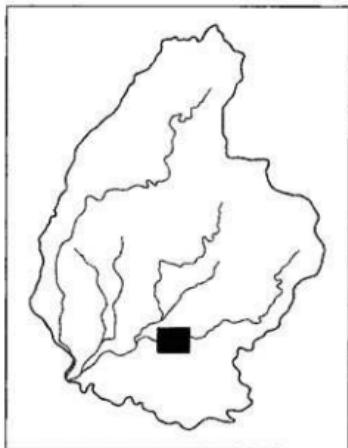
所在地 掛川市城内

調査目的 掛川城公園整備に先立つ発掘調査

調査期間 平成4年6月日～平成5年3月31日  
(平成5年度も継続)

調査面積 7000m<sup>2</sup>

調査主体 掛川市教育委員会



### 調査概要

#### 1. 遺跡の位置

掛川城は市内南部、現在の市街地である平野部に位置する。標高57m、平野部の比高差約30mを測る丘陵に占地する平山城。

城山の主要部は、山頂の天守曲輪を中心に南に本丸を配し、十露盤堀・三日月堀・内堀を巡らせ、本丸・ニノ丸・三ノ丸・松尾曲輪などの主な曲輪を配置している。主要部の南には逆川が貫流しその一部を水堀としている。

#### 2. 調査の成果

##### ①天守下門

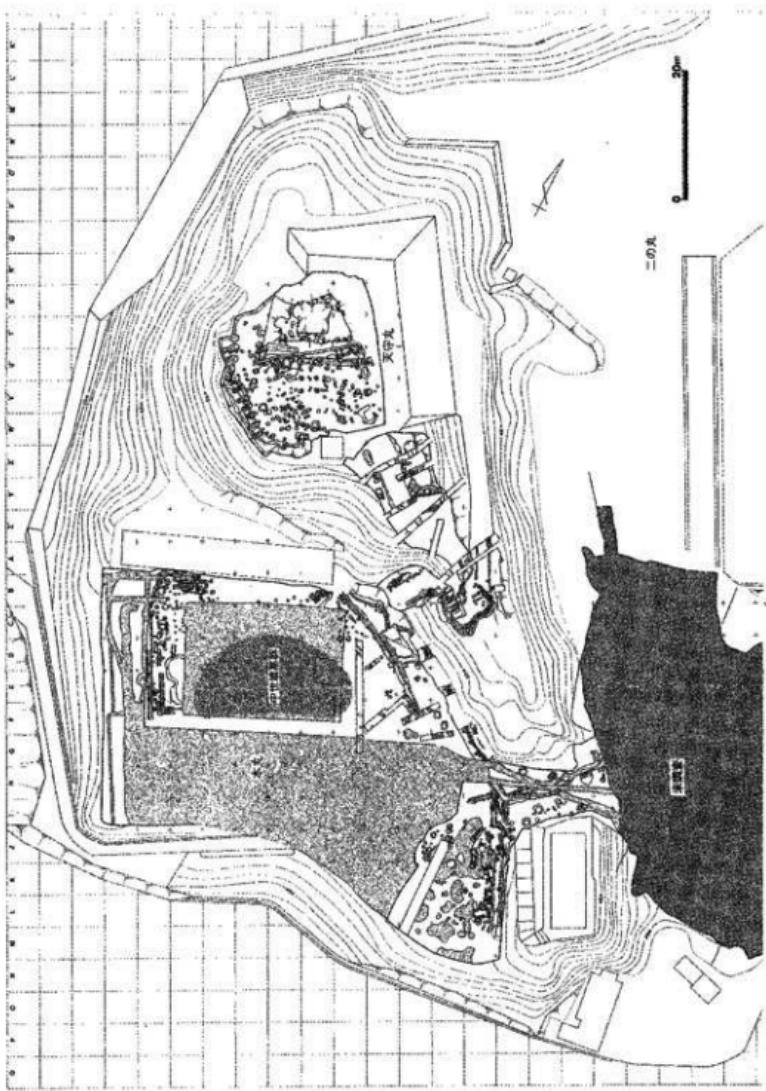
天守閣の南下につくられた門。調査では門の基壇石垣が発見された。礎石・柱穴など門そのものの規模を示す遺構は発見されなかったが、基壇石垣から判断すると、両側の石垣に橋を渡した櫓門形式だと考えられる。

天守下門石垣は1m程の盛土造成の上に築かれており、造成土下では地山を掘り込んだ柱穴・横列が発見された。

##### ②登閣路と腰曲輪

本丸から腰櫓を経て天守下門にいたる登閣路は、折れを多用したつづら折れに造られている。特に腰櫓周辺では玉石で整備された階段と側溝、築地堀の基壇が発見された。

造構全体図





天守下門基壇石垣



腰曲輪築地堀

### ③本丸

本丸の中央大部分は、昭和初期に造られた給水タンクによって搅乱されていたが、搅乱の及ばなかった部分からは柱穴・礎石・溝・溜状遺構（トイレ跡）などが発見された。

トレンチ調査によって、曲輪が造られる以前は南に向かって緩やかに傾斜する谷地形であることがわかった。さらにその谷地の最奥部（本丸中央部）からは五輪塔・宝篋印塔・切石の墓石、及び大石礎が密集した状態で発見された。

曲輪が普請される以前は、集石墓を中心とした中世墳墓群が存在し、曲輪を普請するに際して山裾を削平し中世墳墓群ふくむ谷地を埋め立て曲輪としての平坦地を造成している。

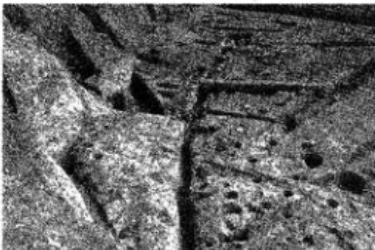
### 3.まとめ

城郭にかかる出土品としては、中国製陶磁器、常滑・瀬戸美濃窯陶器、初山・志戸呂の在地陶器、かわらけなどの土師質土器をはじめ、多量の瓦がある。

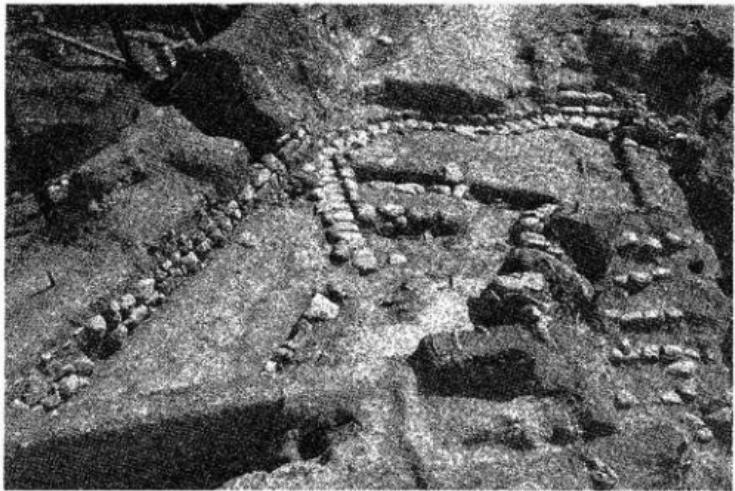
特に瓦には、作製年代が天正年間（1573～1590）頃に比定されるコビキA手法が含まれており、掛川城においては山内一豊によって初めて瓦葺き建物がつくられたことが証明された。

天守閣に代表される瓦葺き建物、天守下門などの石垣、本丸の礎石建物は、いずれも16世紀後半の山内時代に出現したものである。

山内一豊によって近世城郭としての体裁が整えられていくわけであるが、本丸にみられるような大規模な普請はすでに16世紀前半の朝比奈時代にも行われていることが判明した。朝比奈時代の中世掛川城を踏襲しながら、近世掛川城へと変貌していくと考えられる。



本丸遺構群



要曲輪の玉石張り側溝と階段



中世墳墓群

### ③ 掛川城大手門跡

所在地 掛川市掛川712-1他

調査目的 掛川駅北土地区画整理事業に

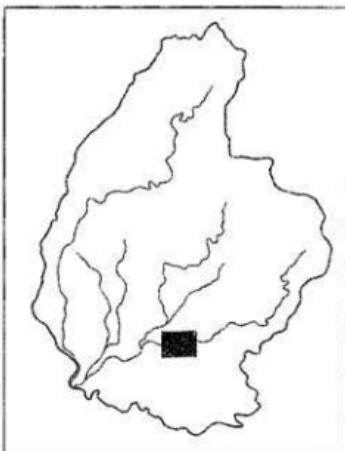
先立つ発掘調査

調査期間 平成5年2月15日～3月31日

(平成5年度も継続)

調査面積 560m<sup>2</sup>

調査主体 掛川市教育委員会



#### 調査概要

##### 1. 遺跡の位置

大手門跡は、掛川駅から歩いて10分程の大手町と呼ばれている地域に位置する。旧東海道沿いには、商店街が立ち並んでいる。

##### 2. 調査の成果

調査は、狭い面積にもかかわらず多くの貴重な資料を得ることができた。調査により大手門の位置、規模（奥行き）、番所小屋跡、そして門を囲む土堀石垣を確認した。

###### ① 大手門

柱を支えるための礎石根固め石の穴9基を確認した。穴は直径2m程で中に石が積まれていた。石は3段から5段にわたり、最も下の石は根石として1m程の石を中心据えていた。これらの根固め石の間の距離は、1から2が1.8m（1間）、2から3が1.8m（1間）、3から4が5.4m（3間）、1から5が2.7m（1間半）、5から6が2.7m（1間半）であった。このことから、門の奥行きは、3間であることがわかった。また門の北側と南側には、幅30cm程の雨落ち溝を確認した。門の南側には、釘や鉢が散らばり、壁に塗られていた白漆喰片が出土した。

###### ② 大手門番所

門の北側では、「正保の城絵図」に描かれている番所小屋の建物の縁石と思われる

石列が確認された。門と小屋との間には、1m×3.5mの範囲で瓦が敷かれている部分があり、そこが通路であったと思われる。

### ③土堀石垣

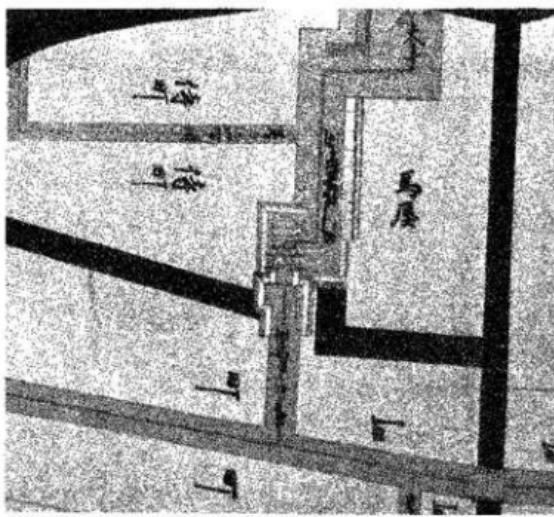
門を取り囲むようにL字に曲がる石垣が確認された。この石垣は、「正保の城絵図」に描かれている大手門北側の土堀の下の石垣と思われる。石垣は残りの良い部分で、2段確認した。前面に80cmの大石を並べ、奥に石垣の崩れを防ぐための裏込め石を積んでいた。また、石垣の下には石垣が沈むことを防ぐための胴木を入れていた。

### 3.まとめ

今回の発掘調査では、1644年頃掛川藩から幕府に提出された「正保の城絵図」に示される、大手門跡、土堀石垣、番所小屋跡などの建物跡が発見された。このことから「正保の城絵図」がかなり正確に描かれていることがわかった。このほか、門の沈下を防ぐための当時の人々の土木工事の様相を知ることができた。



土堀石垣と番所小屋跡



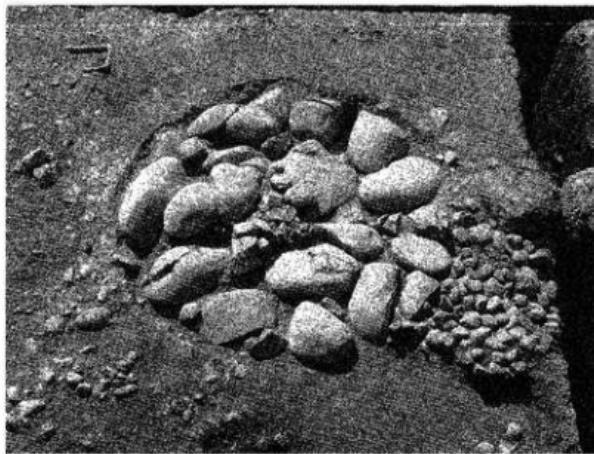
正保の城絵図（大手門周辺）  
(内閣文庫蔵)



遺構全体図



全 景



礎石根固め石跡

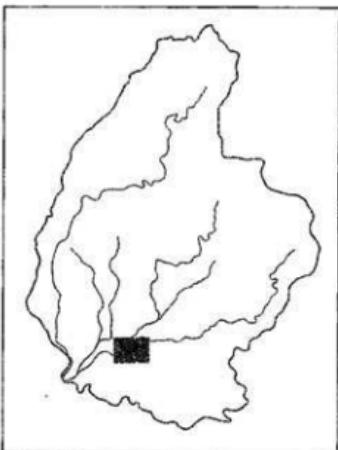
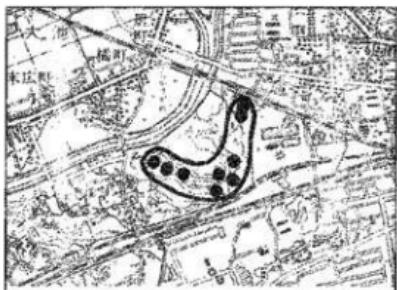
日 本 の 古 墓 と て し  
④ 堀ノ内古墳群

所 在 地 掛川市長谷・下俣

調査目的 新市庁舎等建設に先立つ発掘調査

調査期間 平成4年4月～平成5年3月

調査主体 掛川市教育委員会



#### 調査概要

##### 1. 遺跡の位置

堀ノ内古墳群は、市街地から西へ約2kmの長谷丘陵に位置する。長谷丘陵は小笠山丘陵の北麓にあたり、その南斜面に展開する遺跡群である。

##### 2. 調査の成果

###### ①弥生時代

弥生時代の遺構は、弥生時代中期と、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構に分けられる。中期では木棺墓と土器棺墓が発見された。木棺墓は方形を呈し、その両端には木棺の小口板をはめ込む溝も発見された。土器棺は大型の壺形土器を利用したものである。

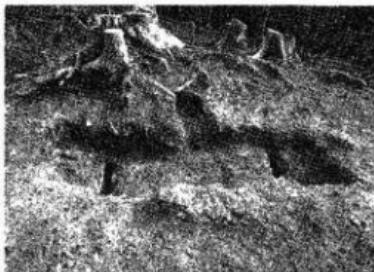
弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡が発見され、集落が形成されていたことがわかった。

###### ②古墳時代後期

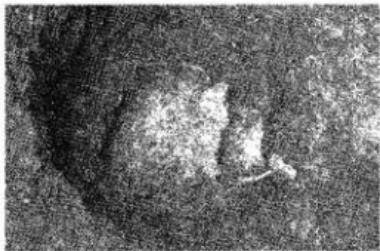
古墳時代後期では横穴墓が発見された。横穴墓の閉塞石には60kg程の重量があるものが使われていた。副葬品として玄室内からは、須恵器・鉄刀などが発見された。



弥生時代中期の木棺墓



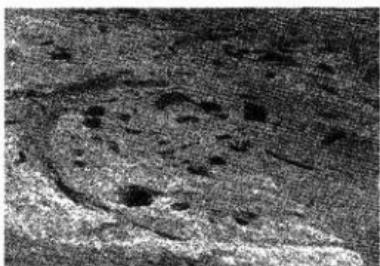
弥生時代中期の木棺墓



弥生時代中期の土器棺墓



弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡



弥生時代後期の竪穴住居跡



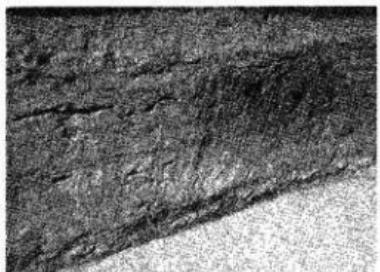
竪穴住居内遺物出土状況



横穴墓入口の石



横穴墓内遺物出土状況



横穴墓内壁工具痕



木芯粘度室古墳全景

## ⑤ 原川遺跡

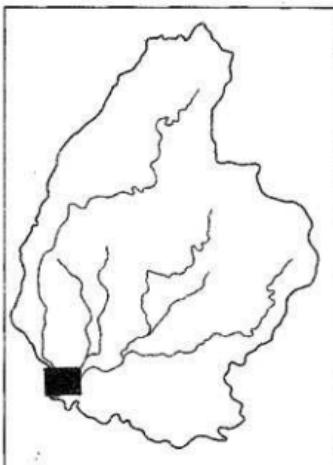
所在地 挂川市領家

調査目的 市営住宅建築に先立つ発掘調査

調査期間 平成4年8月27日～11月28日

調査面積 670m<sup>2</sup> (335m<sup>2</sup> × 2面)

調査主体 挂川市教育委員会



### 調査概要

#### 1. 遺跡の位置・立地

国道1号線を掛川市内から西に向かうと袋井市との市境となる原野谷川に至る。原川遺跡はその原野谷川によって形成された沖積地の東岸に位置する。

#### 2. 調査の成果

##### ①第1面

溝状遺構が2本検出された。幅20～30cm、深さ10cmを測るが長さは調査区外へ延びるため不明。土師器・須恵器の小破片が少量出土しており奈良～平安時代（約1300～1000年前）の溝と考えられる。

##### ②第2面

堅穴住居跡（S B）を3軒、溝状遺構（S D）を5本、小穴多数を検出した。堅穴住居跡はいずれも方形を呈す。S B01は一辺約4m、S B03は一辺約4.5mを測る。S B01と03は重複して発見され、この2軒は時期差をもつ。S B03はS B01廃絶後に造られている。S B02は東・南壁が調査区外へ及ぶため大きさははっきりしないが、一辺6m以上の大型の住居である。遺物は3軒いずれも土師器・須恵器の小破片のみで、時期は古墳時代後期（約1400年前）と考えられる。この時期の堅穴住居は4本柱穴をもつが、遺構の遺存状況が悪いためいずれの住居跡も4本すべて検出されず、煮炊きの炉も発見されなかった。

溝状遺構については、排水・導水路、区画溝などが考えられる。住居跡の方向と溝の

方向が概ね一致しているため、住居と溝は同時期にあったと考えられる。

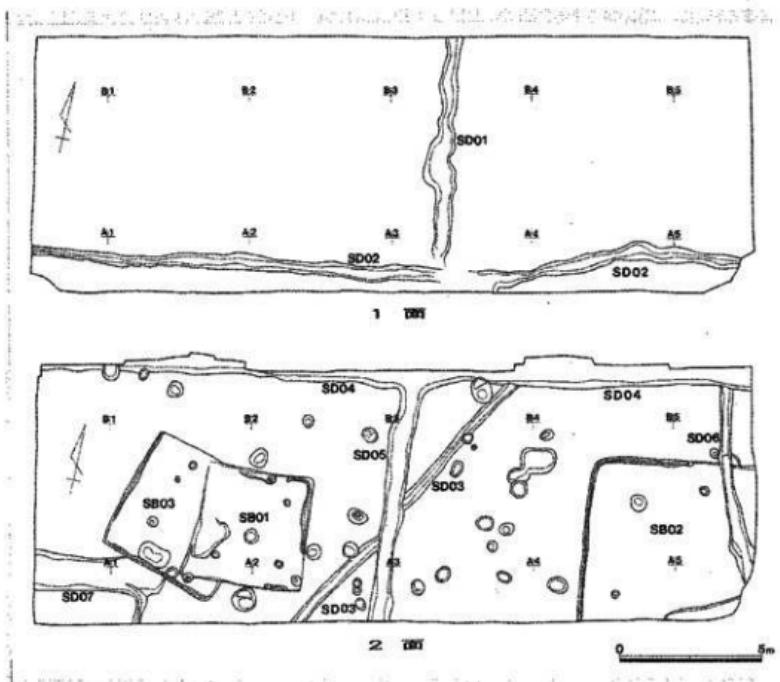
写真的遺物は、須恵器の壺蓋と土師器の瓶である。壺蓋は食物を盛る器の蓋として使われ、瓶は蒸し器で、水を入れた壺の上に組み合わせて使われたものである。



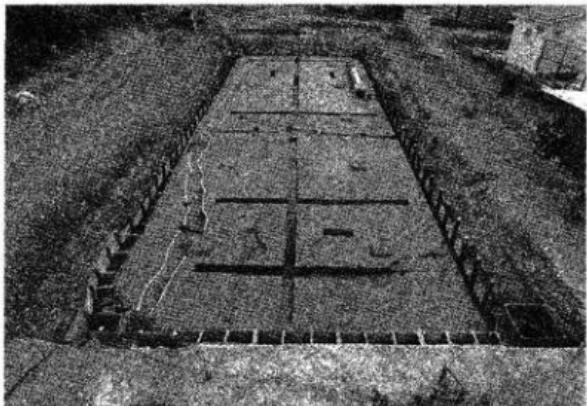
須恵器杯蓋



土師器瓶



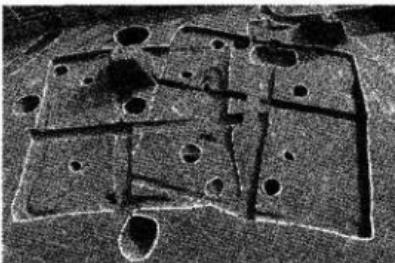
造構全体図



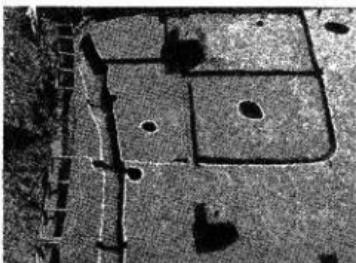
第1面全景



第2面全景



SB 01・03



SB 02・SD 06

ひがし ばら い せき  
⑥ 東原遺跡

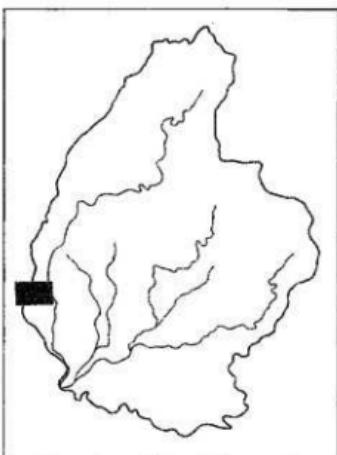
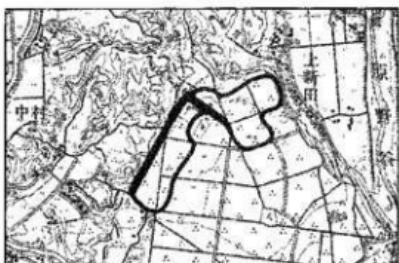
所 在 地 掛川市高田1243-1外

調査目的 市道吉岡3号線、大日線改良工事  
に先立つ発掘調査

調査期間 平成4年5月1日～10月31日

調査面積 4700m<sup>2</sup>

調査主体 掛川市教育委員会



#### 調査概要

##### 1. 遺跡の位置

東原遺跡は、掛川市の西方、原野谷川によって形成された和田岡原と呼ばれる河岸段丘上に位置する。原野谷川流域には、多くの遺跡が分布し、その中には縄文時代早期の土器を出土する遺跡も存在する。

和田岡原は、標高60m前後の上位面を吉岡原、その下の標高40～50mを高田原と呼んでいる。東原遺跡は、吉岡原上に位置している。

##### 2. 調査の成果

調査は、4700m<sup>2</sup>と広い面積ではあるが、道路の改良部分である7m幅が調査対象であるため、広範囲にわたる。それぞれ1～7区の名称を付けた（調査区位置図参照）。

遺構は、集中する地区と少ない地区にはっきりとわかった。遺構が集中するのは、2区中央付近から3区にかけての総延長130mと6区においてであった。そこで確認した主な遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡2棟、方形周溝墓1基、溝2条、土壙、ピットである。幅2m、深さ1mの溝2条を境とし、それより北側に住居跡は広がっていた。切り合い関係をもつものは、2軒のみで他は単独で検出された。

住居跡の規模は、ほぼ5m四方の隅丸方形である。すべての住居跡に火と貼床が確認されたが、貯蔵穴を確認したのは、1軒のみであった。

掘立柱建物跡は、間口1間、奥行き3間の規模であった。柱穴はどれも1m四方の正方形で深さ0.5mの大きさである。

方形周溝墓は、3区南側で1基、1区と2区の交点で1基検出した。1区の方形周溝墓からは、遺物の出土はほとんどなかったが、3区の方形周溝墓からは、弥生時代後期の土器を多数出土した。主体部は2基とも検出されなかった。

その他に2区住居群より60mほど南で土壙墓を1基検出した。時期は古墳時代前期から中期前半と考えられる。規模は長さ2m、幅1.2m、深さ0.6mを測り、長方形であった。床面近くより管玉3個が出土した。

### 3.まとめ

出土した土器より遺構の製作年代は、方形周溝墓→住居群→土壙墓の流れが認められる。また、調査区東側に広がるサカタのタネ内のトレンチ調査の際の様相から、集落の中心は2区東側にあたると考えられる。

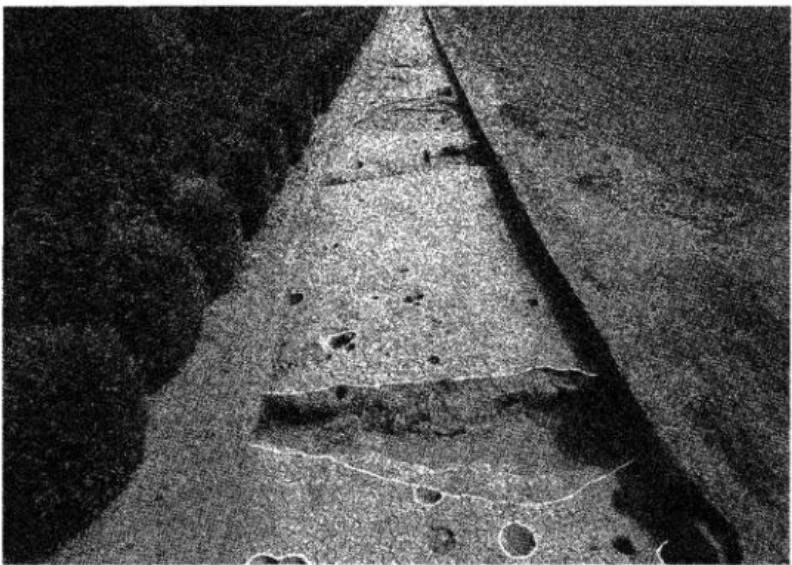
また、土壙墓であるが、東原遺跡の南方1kmにある高田遺跡で同様なものが6基発見されている。土器の出土はなく刀子、直刀が出土している。和田岡原には今後もこういった土壙墓が発見される可能性があり、同時期の古墳との関係を検討していく必要がある。



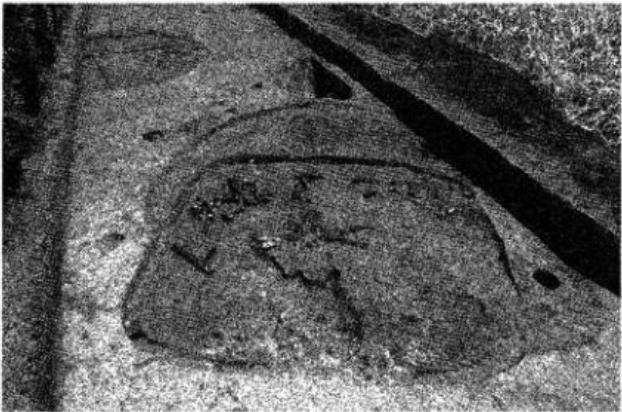
調査区位置図



貯藏穴土器出土状況



2区中央付近南から



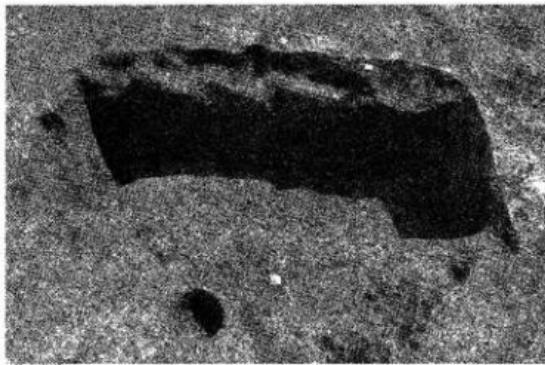
竪穴住居跡



掘立柱建物跡



方形周溝墓遺物出土狀況



古墳時代土壤墓

平成4年度  
掛川市埋蔵文化財発掘調査年報

1993

編集発行 掛川市教育委員会  
掛川市長谷701-1  
印 刷 株式会社 彩光堂  
掛川市宮脇248-1

